

「わっ、また来たぞ！」

「こっちもです！ やはり猫の……」

「もう400件こえています！」

ここは東京大学にある「東大基金」事務局。東京大学の研究や教育活動を応援する寄付金を受けつける窓口です。

この日、職員齋藤さんは途方に暮れていました。寄付を知らせるパソコンの通知が朝から止まらないのです。

特に大きなプロジェクトでもない限り、寄付の件数は1日数件、時期によってはゼロの日が何日も続くことだってあります。それなのに、今朝出勤してパソコンを開くと寄付を知らせる通知がすでに400件以上も届いていました。

寄付してくれた人からのメッセージ欄には、  
「猫たちの幸せを願って、研究を応援します」

「ぜひ猫の腎臓病治療薬研究に役立ててください」

といった言葉が並んでいます。ですが猫のプロジェクトに覚えはありません。

「猫っていうと、獣医学系の案件か？」

「いや、待つてください。ここ、『宮崎先生のインタビューを読みました』とか、『ネットの記事を読んで』などとあります！」

インターネットを検索した職員が「これのこと!？」と言い、みんなが集まりました。

画面に出たニュースサイトには『「ネコの宿命」腎臓病の治療法を開発 東大大学院・宮崎徹教授インタビュー』とあります。

齋藤さんはさっそく東大大学院のデータベースで「宮崎徹教授」を調べました。

「疾患生命工学センターの教授のようです」

「ということは医学系ですよ、人間の病気が専門の。なぜ猫の薬を……」

インタビュー記事には、宮崎教授が始めた猫の腎臓病薬の開発が新型コロナウイルス感染症拡大による資金難により中断したことが書かれていました。

猫は腎臓病で亡くなるケースがとて多い動物です。宮崎教授が開発中の薬は猫と暮らす多くの人たちの希望となっていました。

ただ今回は募集したわけではなく、記事を読んだ全国の愛猫家が自発的に行ったものでした。

寄付金はこの段階ですでに1200万円にのぼっています。

「とにかくこのままでは混乱するから、サイトに専用窓口を作ろう」

そして宮崎教授の研究室に連絡し、面談を予約しました。

とにかく、これまで経験したことのない状況に職員たちは大さわぎです。

翌日、齋藤さんは宮崎教授の研究室に向かいました。同じ敷地内にあるとはいえ、東大キャンパスはとて広く、急ぎ足でも10分近くかかります。

齋藤さんは歩きながら頭を整理しました。

東京大学は国内最高峰の大学です。学内では、大小さまざまな研究が進められています。研究にはたくさんのお金が必要のため、東大基金では国の研究費とは別に企業や団体などから何百・何千万円という単位の寄付金を集めています。個人から

寄付を受ける場合もありますが、それは卒業生や保護者からの寄付が最も多く、主にかかわりのある学部やサークル、イベントなどを支援します。

ところが今回のように東大とはかわりない、一般の人たちによる多数の寄付は齋藤さんが知る限り初めてです。それもほとんどが5000円〜1万円という小口の金額、なかには小学生の子がためていたお年玉からというものもありました。

記事を読んで大まかなことはわかったものの、まだまだ不思議なことはいっぱいありました。

なぜ人間のお医者さんが猫の薬を？

なぜ、こんなに多くの人が宮崎教授に期待をする？

そもそも宮崎教授とはいったいどんな人なんだろう。

初めての事態に好奇心と疑問が入りまじったまま、齋藤さんは研究室に着きました。通された部屋で待っているとドアが開き、白衣をまとった長身の男性が、やわらかな笑顔で入ってきました。



「ああ、どうも。わざわざありがとうございます。ございます。宮崎<sup>みやざき</sup>です」  
宮崎<sup>みやざき</sup>徹<sup>とほる</sup>さん。この本の主人公です。